



日本遺産 Japan Heritage

Vol.
1

「国境の島 壱岐・対馬・五島 ～古代からの架け橋～」 はる つじ い せき 原の辻遺跡（壱岐市）

長崎県の「しま」は、古代から日本本土と大陸を結ぶ海上交通の要衝、対外交流の拠点として重要な役割を果たしてきました。

壱岐島は、朝鮮半島や中国大陸との関わりが深く、弥生時代には「魏志」倭人伝に「一支国」として記され、海上交易で栄えてきた歴史があります。

中でも原の辻遺跡は、弥生時代から古墳時代の初め（紀元前3世紀頃～紀元4世紀頃）に栄えた一支国の王都で、平野の丘陵に造られた祭儀場を中心に居住区をつくり、その周囲に二重、三重の環濠を掘り巡らせた弥生時代を代表する大規模環濠集落跡です。

原の辻遺跡からは、当時最先端の土木技術により造られた船着場跡をはじめ、国内唯一の発見事例である人面石など、当時の生活や信仰、東アジア諸国との交流を物語る貴重な遺物が数多く発見されており、現在、その一部は一支国博物館で見ることができます。



日本遺産とは

地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産（Japan Heritage）」として文化庁が認定するもの



人面石（国重要文化財）

宗教が存在しなかった弥生時代には、先祖や海・陸を司る霊などが信仰の対象だった。人面石は先祖の霊を祀る儀式や豊漁・豊作を祈願する祭祀などの場において、シンボリックな祭器として用いられたものと考えられている



壱岐市立一支国博物館

市民の顔をモデルにした160体のフィギュアで一支国の生活を再現した一支国トピックや発掘された土器などに触れることができる展示など、楽しく学べる体験型の博物館。設計は、故 黒川紀章氏

問合せ 県の文化振興課 ☎095-895-2762

日本遺産 国境の島

検索